

農作業の苦労味わう

県立大と 県外7大学 学生たちが合宿



県立大（小林俊一学長）の学生と県外の学生が交流を深める「農業合宿」の農業体験が21日、大潟村と八郎潟町の農家で開かれ、学生たちは大豆の選別作業などを通じて農作業の大変さを味わった。同大が2007年から行っている

芹田さん（中央）から大豆の選別作業を教わる学生

る学生支援プログラム「薫風・満天フィールド交流塾」の一環。

農業合宿には弘前大、山形大、東北大、慶応大、東京農大、東京農工大、京都大の7大学で農業などを学ぶ学生10人が県外から参加。今月19日～23日の5日間、同大生活実習館（大潟村）に宿泊しながら農業をテーマにしたグループディスカッションなどを行っている。

21日は、県立大の学生7人も参加して四つのグループに分かれ、4農家で農業機械の見学やネギの種まきなどを行

った。芹田省一さん（60）は同村の作業場には学生4人が訪れ、あきたこまちの精米作業などを見学したほか、納豆向けとして出荷する大豆から変色したり欠けた規格外の大豆を手で取り除く選別作業を体験した。

東京農大国際情報学部1年の藤原育菜さん（19）は高知県出身は「農産物を委託販売するサークル活動を行っているが、合宿参加者の話を聞いて良い刺激になった。大豆の選別作業は手がかじかんで難しかった。普段食べている納豆はきれいな豆だけだが、大変な作業が背景にあることが分かった」と話していた。

（寒川井葉子）